

粉は吐魯番に在つて一斤銀三分五なるも、省城にては二分半に過ぎず。是れ彼等が麵粉を齎らす所以なりと。又當地附近に全山、石膏より成るものを見たり。

翌二十三日行程四里餘、達坂タパン村に宿す。是に通ずる道路には、新舊二條ありて、里程相同じきも、舊道は峻峻なる達坂蒙古語の意山を越え車輛の通過困難なるが故に前巡撫潘某、大資を投じ、溪谷に沿ふて新道を設け、一昨年即ち我明治三十八年十一月に竣工せり。即ち河溝より約五里の間兩岸絶壁、廣狹不定の溪流、幅五十以上、二百米突以内、水幅七乃至十數米突に隨ひ、幅三米突若くは五米突に開鑿せるものにして、中間一の木橋を架せり。

初め予が此行程に就かんとするや、心竊に惟へらく、天山二回の超越と、崑崙一回の通過に於て無難なれば則ち足ると。而して明治四十年二月二十三日、即ち本日只今、其の第一回天山超越を遂行したり。豈多少の感慨なからんや。曩に吐魯番城より達坂山を遠望せし時は、峻嶺疊々雲表に聳えて、其の超過の益々容易ならざるを覺えたりしが、歩一步、日一日と上登するに従ひ、坂路の甚だ緩なるを怪み、既に同嶺に達するも、尙嶺中に在るを感せず、吐魯番出發以來、連日恰も平地と同じき山